

ナロードニキの二つの異端

— ピーサレフとトカチョーフ —

渡 辺 雅 司

1

ナロードニキとは、狭義には1870年代に大挙して「民衆（ナロード）の中へ」入って行った革命的インテリゲンチアに端を発する非マルクス主義的の革命家の系譜を指すが、広義には、ゲルツェンを祖とし60年代のいわゆる革命的民主主義者もそこに含めて用いられる。⁽¹⁾ 本論文でナロードニキという場合、後者の意味に解する必要がある。

ナロードニキエストヴォの理論は、西欧ブルジョア社会への幻滅を直接の契機として構築された。アレクサンドル・ゲルツェンはプロレタリアートの極貧とブルジョアジーの俗物性を西欧に見、西欧文明のこの袋小路からの脱出口を祖国ロシアの農村共同体と、そこに生活するナロードの伝統的共産主義的精神に求めた。ロシアは資本主義を終ずに社会主義に到達できる、とゲルツェンは確信する。そしてこの確信は歴史哲学的には、歴史における「後れたものの優位性」⁽²⁾のテーゼとして定式化され、後のすべてのナロードニキによって多少の

(1) ソ連におけるナロードニキ研究の専門家ガラクチオーフ、ニコンドロフは「ウエ・イ・レーニンはいよいよゲルツェン、チェルヌィシエフスキーおよび『60年代人』一般を広義のナロードニキに加えている」と述べる。А. А. Галактионов, П. Ф. Никандров 《Русская философия XI-XIX веков》 Ленинград. 1970, стр. 441

(2) ゲルツェンは、この優位性を次のように逆説的に書く。「われわれは若干の問題において、ヨーロッパに非常に遅れているからこそ、ヨーロッパよりもより前進しており、かつより自由である」と。А. И. Герцен, Собр. соч., в 30-и томах том

ニュアンスの違いはありながらも最後まで保持される。これがナロードニチュエストヴォの第一の特徴たる農民社会主義的性格である。

ロシアの共同体は国家権力とは無関係に存在しえたがゆえに、その自治機能を維持しえた。従って共同体を基礎に建設される未来社会は無政府的なものではなくてはならないと考えられた。ここに見られる国家権力否定の思想は、後に革命闘争における非政治主義的性格として結晶し、ナロードニチュエストヴォの第二の特徴をなす。

しかし共同体農民の共産主義的要素は、未だ低次のものであり、全体的福祉の点では平等で肯定的に評価されようが、個が全体に埋没するという否定面を持つ。従ってスラヴ派のように現前の共同体を無条件に讃美するわけにはいかない。ゲルツェンは言う。「予め適応性のある民衆の形態がなければ、社会科学は社会的幻想のうちに消失するであろう。他方、普遍一般化的科学がなければ、民衆のロシアの生活形態はスラヴ派の幻想のうちに消散してしまう⁽³⁾」と。一口で言えばスラヴ的生活形態と西欧の先進科学の結合への志向である。そしてこの志向は、先進科学を体現する少数インテリゲンチアによる多数のナロードの覚醒の義務という半ば倫理的な表現を見る。これがナロードニチュエストヴォの第三の特徴、啓蒙的性格である。この第三の特性はそれが道徳的要請に裏打されているが故に、ナロードニチュエストヴォの思想の体質（思惟構造）を決するものであったと言っても過言ではない。更にそれは革命運動における少数インテリゲンチアの役割の重視、歴史における意識の能動性の過大評価、ナロードの理想化と表裏一体をなし、状況に応じてジャコパン的運動に転化する可能性を内包することを銘記せねばならない⁽⁴⁾。

以上のようにナロードニチュエストヴォの一般的特徴づけをした上で、仮に

V стр.276 なおチュルヌイシェフスキーやドブロリューボフも同様の信念を表明している。

(3) А.И. Герцен, Ibid. том XVIII, стр.8

(4) J. ルカーチは、チュルヌイシェフスキーの革命的民主主義を空想的社会主義とジャコパン的革命的統一の志向と捉えている。ルカーチ著作集6 白水社刊 200~201頁参照

「異端」と名づけたピーサレフとトカチョーフの思想の分析に移ろう。この両者については、これまで多くの研究者によってその思想的継承関係が指摘されてきた。⁽⁵⁾ その際論点となるのは両者における「インテリゲンチアとナロードの関係」の捉え方であるが、大抵の場合両者の外的類似の指摘だけで、内的関連と差異については十分検討されているとは言い難い。そこで本論では一面的になることを恐れず敢えてこの問題に焦点を絞り、両者の継承関係を吟味する中で正統ナロードニキに対する彼等の異端性を明らかにしたいと思う。

2

ピーサレフとトカチョーフの革命思想の根柢にはナロードの自立の否定があらと言われる。この否定の意味を明確にするには、両者の思想的原点にある確信を分析せねばならない。

ドミートリイ・イヴァーノヴィッチ・ピーサレフ（1840～1868）の社会評論家としての活動は、1861年、かの「農奴解放」と前後して始まる。精神異常にまで昂進した内面的危機は、彼を既成の知識体系への不信とその破壊の必要性の自覚へと導き、この個人的体験の重みが、当時のインテリの運動に見られた安易な幻想と、その幻想を支えるインテリの倨傲への批判を可能にした。

インテリがナロードを啓蒙し、意識を覚醒することによって両者の革命運動における連帯は可能である、とするインテリ内部の一般的風潮の中に、この幻想と倨傲が集約的に表現される。だがナロードの啓蒙の必要性とは、未だ理論的解決にすぎず、その実際の解決との間には大きな隔りがあるのだ、とピーサレフは考える。啓蒙は、ナロードの生活の理解、啓蒙する側の確固たる知識、相互の信頼関係という三条件があって初めて可能となる。ところがピーサレフによれば、当時のロシアにはこれらの条件がすべて整っていなかった。生活の

(5) トカチョーフを論じる際、ピーサレフとの継承関係について必ずといって良い程言及される。紙幅の関係上文献名は列記しないが、社会状況と大衆の関係の静態的理解、ピーサレフのリアリズムにおける「メカニカルな道」とトカチョーフの少数前衛による革命的陰謀との共通性、の二点に論点は整理されよう。

場でナロードと隔絶されていたインテリゲンチアにとってナロードの生活条件とそれに規定される行動様式は、文学によって知り得たのみである。これがロシア文学におけるリアリズムの基本的要件＝「民衆性」という定義を受ける。^{ナロードノステ}ピーサレフの第一の批判は、ロシア文学に伝統的な「民衆性」の空洞化に向けられる。

「ナロードを愛し、その成長度からいってわれわれより下に立つ人々の世界観にまで降りて行く能力を持ち、彼らの喜怒哀楽、誤謬や苦悩に抽象的な思想の冷やかな高みから接することのない」人間にしかナロードの生活は再現できない、とピーサレフは言う。抽象的な思考能力を有し、事物を普遍的、大局的に眺められるのが、インテリの長所であるとすれば、それは実践の場においては応々にして普遍と個別を結ぶ環を喪失し、専ら理論を援用し、自分自身までも客体化してしまうという深刻な短所を内包する。従ってこの段階にインテリがとどまる限り、ナロードの再現は空文句に終り、ナロードは文学において常に虚像として現われる。ピーサレフの内面的危機は、抽象的思想の持つこの欠落部分の自覚によってひき起されたのだった。そしてこの自覚を経て初めて次の言葉が出てくる。「ナロードはわれわれよりも自然に近い所に立っており、自分を取巻く世界をわれわれよりもはっきりと眺めている。何故なら彼らの眼差は、われわれの生活の偏見ある虚偽の諸概念によって曇らされていないから⁽⁷⁾だ」つまりインテリにはナロードに教えをたれるだけの確固たる知識も信念もない。更に第三の条件たる信頼関係もない。インテリは「ナロードを愛していると自ら想像しているだけだ。というも殆んど知りもしない者をわれわれが実際に愛するなんてことは、まずありえないからである。ナロードはわれわれを愛してもいなければ、信じてもない……歴史はピョートルの遙か以前にわれわれをナロードから引離した⁽⁸⁾」とピーサレフは言う。

これらの基本的条件を欠いた所での、ナロードへの一方的啓蒙は、自己に対する、ナロードに対する幻想の所産なのだ。自己に対する世界に対する懐疑な

(6) Д.И. Писарев, Собр. соч. в 4-х томах. т.1 стр.57 傍点は筆者。

(7) (8) Д.И. Писарев Ibid. стр.60~61

しに、福音を説く者に禍いあれ。ピーサレフに言わせれば、インテリの献身的努力にも拘らず、ナロードの意識が覚醒されない事実は、インテリが以て幸いとすべきことであり、未来においてナロードが果す創造的役割を保証するものなのだ。無能なインテリが「ナロードの思考様式に何らかの影響を与え得ると考えられるならば、わが国の未来にとって恐しいことだ。安っぽい書物によって、何世紀にもわたる偏見から醒めることができるようなナロードは、教育する価値もないつまらないナロードである⁽⁹⁾」

以上の確信にもとづいてピーサレフはインテリゲンチアをナロードから引離し、インテリゲンチアのインテリゲンチアとしての自立をめざす。そしてこの自立の中にナロードの自覚を引き出す契機を求めて行く。

次にもう一人の「異端」ピョートル・ニキーチッチ・トカチーフ（1844～1885）の思想的出発点にある確信を見てみよう。彼の思想は狭義のナロードニチュストヴォの二大潮流たるラヴロフ主義、バクーニン主義に対比され、ジャコバン主義あるいはブランキ主義と呼ばれる。その名が示す通り、彼の革命理論はナロードニキのタブーを破り、少数前衛による陰謀と革命後の独裁を特徴とし、そこにおいてナロードは単なる物理的エネルギーと位置づけられる。だが大胆にもこうした綱領を掲げたトカチーフには、彼なりのロシアの現状認識と確信があった。

「無教養な大衆の理想化—これはもっとも危険でもっとも広まっている幻想の一つである⁽¹⁰⁾」とトカチーフは『打ち破られた幻想』（1868）の中で書く。ナロードの理想化のタイプは三つに大別される。第1はナロードは無知、粗暴で変革の担い手とはなり得ない。したがってインテリは干渉せず、ナロード自身が自立するのを待つべきとするタイプ。これはナロード自体を理想化してはいないが、彼らの置かれている経済条件の理想化に陥っている。第二は、ナロードの精神、天才、原理を聖物視し、インテリの知性の歪みを反省しナロード

(9) Д.И. Писарев Ibid. стр.68

(10) П.Н. Ткачев Избр. соч. на социально-политические темы в 4-х томах т.1, стр.326

に跪拝するスラヴ派的理想化のタイプ。トカチョーフによると、この二者は、自己の生活において変革の必要を感じていない自由主義者のものであり、彼らの良心の痛みは緩げが、インテリをナロードの悲哀に対する無関心に導くだけである。第三は、ナロードはたとえ知的には後れていても、道徳的精神的にはインテリと同等あるいはより高い所に立ち、困難な経済条件にもかかわらず、ナロードの内部には個人的に自立への動きが見られるとするタイプ。この理想化は、それが社会変革をめざすインテリゲンチアのものであるだけに事態は深刻である。いわゆる「民衆文学」に描かれるナロードとは、このように理想化された百姓なのだ。内面の人間性を浮彫にされて文学に登場するナロードとは、トカチョーフによれば、「百姓の装をし、百姓訛で話す」インテリに他ならず、インテリが彼等に共感するのは、それが「インテリ自身のコピー」⁽¹¹⁾だからなのだ。幻想の領域におけるこうした共感、連帯こそ革命運動を破滅させるものである、とトカチョーフは断ずる。

このようにピーサレフとトカチョーフは、現時点でのナロードの自立を否定した。前者は啓蒙の不可能性の観点から、後者は経済条件の変革がない限り、意識も変革されないという観点から。ピーサレフは言う。「ナロードが今はもう目を醒めているのか、それとも以前同様眠っているのか—われわれは知らない。ナロードはわれわれと話をしないし、われわれも彼等を理解できない。唯一つ確かな事は、ナロードが目醒めるとしたら、自分自身で内的欲求によって目醒めようという事である。われわれは号泣やアピールで彼等を目醒めさせる事はできないし、愛や抱擁もそのためには何の役にもたない」⁽¹²⁾と。トカチョーフは言う。ナロードは粗野で野蛮である。この状態は彼等が貧困でなくなる時解消する。貧困問題の解消はナロードが個別の活動を全体的活動に統合する時実現する。ナロードがこうした活動の能力を得るのは、実践の場で自らの背後に自らを支える力を確信した時である。この力こそインテリゲンチアが創り出さねばならぬ。では何処にその力を求めるべきか？「自分自身の

(11) П. Н. Ткачев, Ibid. стр. 341

(12) Д. И. Писарев, Ibid. стр. 68

中、自らの知識、自らのより高い知的発達、⁽¹³⁾ 道徳的、知的条件の中に」である。

この最後の文章はインテリゲンチアの知的道徳的自己完成の意味に解すべきではない。トカチョーフはこの時すでにインテリゲンチアによる強力な革命的前衛を念頭においていたのである。一方ピーサレフは、ある意味でインテリの「知的道徳的自己完成」を志向したといえる。このようにナロードと切離された所で、インテリゲンチアのとるべき活動の方向は、ピーサレフとトカチョーフでははっきり異なる。ところが後にピーサレフが社会変革のヴィジョンを「リアリズム」として確立した時、奇妙にもある点でトカチョーフと重なることになる。この点で両者の継承関係が多くの研究者によって指摘されるのだが、その吟味は後章に譲ろう。

ところでこの両者がナロードニキの中にあってナロードへの「愛」を「拒否」し、インテリゲンチア内部の運動の再編成を提起した歴史的意味は何であろうか？ この意味を正しく把握しない限り、彼等の理論も所詮インテリゲンチアの傲りとして片づけられてしまうであろう。

周知のように60年代の革命運動は、雑階級インテリゲンチアをその担い手とした。雑階級インテリゲンチアの急進化は、ロシアのブルジョア化に基づくインテリゲンチアの大衆化（エリート性の喪失）によって説明される。

彼等にとって「知的仕事とそれに密接に関連する他の労働領域が、唯一の生存手段であった」が、後れたブルジョア社会では、「この生存手段の保障はきわめて脆弱であり」⁽¹⁴⁾ 一片のパンをめぐる闘いはインテリゲンチアにとって日常的なものであった。インテリゲンチアのこうした生活条件の変化こそが、彼等の世界観と行動にそれまでとは異なる新しい質を与えたのである。社会変革とは、自らが直接間接に抑圧してきたナロードの救済である以上に、インテリゲンチア自身の解放なのである。それゆえ従来貴族インテリゲンチアの運動に見られるような、道徳的義務感や、ナロードへのセンチメンタルな人道主義的

(13) П. Н. Ткачев, Ibid. стр. 369

(14) // Ibid. стр. 277

アプローチは生まれていない筈である。しかしゲルシェンゾーンの言うように、インテリゲンチアとは、文字どおりおのれの外で生きている。ナロードに対して知的貴族であるインテリゲンチアには、常に罪の意識がまといつく。この罪の意識によって、個人志向（エゴイズム）が自己犠牲という倫理的美德を媒介として普遍志向へと容易に短絡する。そしてこの際自己に対しては美德によって良心を救い、他者たるナロードに対しては、それを理想化することになる。この個人志向と普遍志向の短絡に警鐘を発したのがピーサレフであった。ナロードの啓蒙を否定したピーサレフは、エゴイズムの十全なる発現を唱える。一方革命とは自己のためのものであり、だからこそその成否に自己の存在がかかっている、という意識に徹底したトカチーフは、革命の可及的速かな成功をめざして、一切の理想化を捨て、ナロードを物理的エネルギーと位置づけ、インテリゲンチアの厳格な組織の必要性を説く。

3

現時点でナロードの啓蒙は不可能であり、ナロードの自覚的行動も期待できないと確信したピーサレフが、「リアリズム」という形で独自の変革の理論を確立するに到る道程は二段階に分けて考えられる。

第一段階を一語で特徴づけるならば、インテリゲンチアが普遍性とのパイプを断切り、個的生活に沈潜し、その意識化を志向する事である。この志向は、一部の先駆的インテリゲンチアの行動の中に見られる「前衛的コミュニケーション」が、コミュニケートされる側の自立を促すことなく、大衆としてのインテリ内部にさえ「たまり水」のごとき知的停滞を生むことを暗に批判すると共に、この「たまり水」を支えるいわゆる「世論」を破壊し、大衆としてのインテリ各自が知的確信と、日常的行動における不屈の意志を身につけることをめざす。

ピーサレフは、そのための武器をエゴイズムと、自然科学に基づく唯物論に求めた。「全き生活を生きるよう心掛けよ。自己を調教したり毀したりすることなかれ。既成の秩序や群衆の好みに合せて独創性と独自性を圧殺することな

⁽¹⁵⁾かれ」とピーサレフは言う。全き生活を生きることは、一般に考えられているように、一定の理想を目的とし、それに向って自己を鍛えて行く事ではなく、現実の生活をとことん生きることであり、その結果として、人生の目的は見い出されるのだ。人間は「知的、精神的奴隷」になってはならない。「人間の精神の領域に体系が持込まれると、それは馬鹿げたものになる。われわれには体系を通して事物を眺める習慣がしみついている⁽¹⁶⁾」この体系こそインテリの中に巢喰う偏見である。知恵の木の実をかじったインテリには、諸々の体系が追体験することなく、すんなりと入り込み雑居する。ところが「ある事を理解しないためには、大変な知性を必要とする⁽¹⁷⁾」のだ。こうした偏見が、知的活動ばかりか、精神的活動、日常実践まで支配し、インテリを生活の場から離れた所に立たすのである。但しピーサレフが「体系」と言う場合、観念論哲学一般はもとより、いわゆる「美学」、道徳までを意味することに注意しよう。ここには後に「美学の破壊者」として現われるピーサレフの萌芽が垣間見られる。

ピーサレフは「体系」という偏見の呪縛からの出口をエゴイズムを発条とする情念の解放に求める。「エゴイズムすなわち自己の人格^{リーチノスチ}への愛は、快樂を人生の目的とする。しかし快樂の選択を一定の対象に限らない⁽¹⁸⁾」とピーサレフは述べる。注意を要するのは、ここでピーサレフが念頭においてるのは、インテリ一般ではなく、中産階級たる雑階級インテリであり、そのエゴイズムは搾取者のエゴイズムとは異なるはずだ、との確信がある。

エゴを全面的に押し出すことにより、人は他者とぶつかり、現実へと眼を向ける。そしてこの現実生活こそが、インテリに確固たる信念を与える。一方知的領域では、自然科学だけが人を現実へと向わせる。

(15) Д.И. Писарев, Ibid. стр.120

(16) // Ibid. стр.121

(17) А.И. Герцен, Ibid. т.3 стр.79

(18) Д.И. Писарев, Ibid. стр.185

リーチノスチという言葉は、インディヴィデュアルと異なり、具体性、肉体性を具えた概念である。それ故普遍とは直線的に結びつかない、と内村剛介は言うが、この事を考慮する時ピーサレフの言葉の意味が一層明瞭になる。

60年代の革命的民主主義者の運動は、哲学の領域では観念論哲学の否定を特徴とする。その際出発点となったのは、フォイエルバッハの人間学的唯物論であり、それが後にはデュヒナー、モレスコット等の機械的唯物論へと傾斜していった。「唯一つ自然科学だけが生の現実に深く根ざしており、それだけが理論や虚構から全く独立しており」その領域には反動の入り込む余地もなく、傾向とも無縁であり、「道徳によって虚飾されず、諸体系によって切断されず、哲学者たちの徒然の思索によって考え出されたものではない現実の生活に人間を直面させる⁽¹⁹⁾」とピーサレフは言う。

なるほど自然科学は実証を基礎とする。この点では観念論打破の強力な武器である。そこにおいては人間も1つの自然として考察される。だがその時人間は個別概念から普遍概念へとすりかわる。哲学はその生命を終え、その場所は自然科学にとって代られる、とフォイエルバッハが言う時、それは彼の類的人間学に基づいているのだ。自然科学が後に経済学と結びつく時、ピーサレフには歴史の動因としての生産力という一般のナロードニキが忘れていた視点が生れるが、フォイエルバッハにならって人間を本性的に把握した事によって、「リアリズム」における功利主義哲学への道を開いたという点では、自然科学はピーサレフにとって躓きの石であったとも言える。

この段階のピーサレフは、まさしくロシア・ニヒリストの典型である。だからこそバザーロフを肯定的に評価した。「徹底的な無関心主義にまで到達するが、同時に個人の人格を冷徹と自立の極限にまで発展させるこの冷やかな絶望（バザーロフの状況である）は、知的能力を緊張させる。行動する可能性がないから、人々は思惟し模索し始める。生活を変革する可能性を持たないから、人々は思想の領域で自分の無力に復讐する。そこでは破壊的な批判の動きを押し止めるものは何もないのである。迷信や権威は粉々に砕け散り、世界観は雑多な幽霊のような概念から完全に洗い清められる⁽²⁰⁾」とピーサレフは述べ、バザーロフの中に未来の革命家の姿を見た。

(19) Д. И. Писарев, Ibid. т. 2 стр. 224~225

(20) Д. И. Писарев, Избр. произ., 1968 Ленинград стр. 62

しかしこうしたインテリゲンチアの個人的営為は容易に社会変革の事業とは結びつかない。この自覚がピーサレフを新しい変革の理論の模索へと駆り立てた。

第一段階から第二段階の「リアリズム」への飛躍はペトロ・パウロ要塞監獄の中で起る。経済学（イギリス古典派，フランス空想的社会主義）の研究，就中歴史における労働の役割の分析と変革期（フランス革命）における大衆の役割の検討が，この飛躍を助けた。

人間には生来的に二つの基本的欲求すなわち物質的欲求と連帯の欲求がある，との人間学的テーゼから出発し，この欲求は，本来労働という行為の中で初めて充足されると，ピーサレフは確信する。勿論ここで言う労働とは搾取社会におけるものではなく，然るべく発展させられ組織化された労働である。「われわれは労働を尊敬する。だがこれだけでは不十分である。労働は快適なものではないし，労働の成果は豊富（工業化による生産力上昇の必要性）で，それが勤労者自身の手に入り（搾取制度廃止の必要性），肉体労働は常に広汎な知的発達と調和して進む（精神労働，肉体労働の分裂の止揚の必要性）ことが必要な⁽²¹⁾のだ」次に歴史において大衆を革命へと起たせるのは，イデーではなく経済条件であり，大衆の熱情にもとづく革命的破壊力は，指導者の明確なヴィジョンがない限り，根底的変革へとは導かない。

これらの認識を踏まえてピーサレフは，「リアリズム」を構築する。リアリズムとは，一語で言えば「知力の厳格なる節約」である。それはインテリゲンチアが「美学」を捨て，自己の知力を社会的に有用な労働に投下することによって果される。社会的に有用な労働とは，ピーサレフによれば，衣食住の問題を解決すべき物質的生産労働である。ではいかにして？ インテリゲンチアが自分の好みに合う自然科学を身につけ，唯物論的世界観で武装すると同時に，その科学を生産の分野で応用することによってである。このような実践活動を担う「新しい人々」をピーサレフは，「思考するリアリスト」あるいは「思考する

(21) Д.И. Писарев, Ibid. Т3. стр. 330

プロレタリアート」と名づける。「新しい人々とは、自分の仕事を愛する思考する労働者である」⁽²²⁾「新しい人々は労働しており、自らの労働の広い空間と発達を願望している。彼等のオルガニズムの根源的欲求をなすこの願望において、新しい人々は地球上の数百万のすべての勤労者……と一致しているのだ。利害の一致は共感を生み、かくして新しい人々は、すべての人々のあらゆる現実的欲求に、自覚的に熱い共感を抱くのである」⁽²³⁾とピーサレフは言う。革命情況の退潮した60年代後半にあって、インテリゲンチアは、ナロードを煽動したり啓蒙したりする代りに、自ら知識と結合された本来的労働を実地に行い、労働を合理的に組織し、生産力の増大をはかることだ。こう言ったからとてピーサレフはインテリゲンチアが資本主義制度の中に組みこまれ、それを推進することを推奨しているわけではない。彼は現状のままだったらロシアにも西欧の運命が訪れることを予想し、ロシアは予めそれを予防しなければならぬとのナロードニキ共通の認識がある。しかし彼は資本主義の持つ開化的側面＝工業化による生産力上昇を見逃さなかった。思考するプロレタリアートなる概念は、この二つの認識から生まれた苦肉の策であり、当然空想的なものとならざるを得なかった。だがここではその現実妥当性を云々するよりも、リアリズムの持つ理念的意義に注目したい。

「思考するリアリスト」の増大する過程にナロードが自立する契機が含まれる、とピーサレフは考える。「ナロードを教育しようと思うならば、教養社会の教育水準を高めよ」⁽²⁴⁾とピーサレフは言う。この教育水準は、現実に根ざした科学と、知識を真に必要とする労働の場によって高められる。そして生産の場でナロードはインテリゲンチアの感化を受け、知識に対する内的欲求を目醒めさせる。合理的な労働組織の中で、インテリゲンチアと共に働く事により、ナロードの福祉は増大し、書物や宣伝による啓蒙ではなく、ナロード自身が、自らの幸福にとって知識が有用な事を悟り、進んで知的糧を求め始めるのである

(22) Д.И. Писарев, избр. произ., стр. 405

(23) " " " 396

(24) " " полн. собр. в 6-ти томах т.4 Спб. 1897, стр 130

う。この時、ナロードの真の自立が始まるのである、とピーサレフは予言する。つまりナロードのためにインテリゲンチアにできる事は、ナロードが自立する条件を労働の分野で準備することだけなのだ。こうして未来における勤労者の解放は、「勤労者の労働力、実践的明敏さ、勤勉に、人間相互間の諸関係の明確な理解と、個別の観察から普遍的結論と広汎な推論にまで上向する能力が結合された時⁽²⁵⁾」はじめて勤労者自身によってなされよう。その時ナロードとインテリゲンチアなる差異は消滅し、一人思考する労働者が残る、とピーサレフは考える。

ところで彼は歴史発展のプロセスを、「ケミカルな道」と「メカニカルな道」に大別した。上述のリアリズムは、前者すなわち平和的進歩の道に該当する。だがリアリズムは、もう一方のプロセスであるメカニカルな道(暴力革命)を視野に入れていないであろうか？ ピーサレフは一部の研究者の言うように、歴史における意識の役割を過大視し、社会状況を無視した主観主義者ではない。「ナロードの感情、ナロードの熱狂は全き権利を保持する⁽²⁶⁾」とピーサレフははっきり書いている。ナロードの自然発生的蜂起は、意識性という点では不十分であるが、インテリゲンチアの内部に明確なヴィジョンを具えた指導者の隊列が形成されているなら話は別である。これがピーサレフのジャコバニズムと呼ばれるものである。しかし注意しよう。ここでも指導者の隊列は、生産の場から切離された職業革命家ではなく、思考するプロレタリアートとして、ナロードと一体化しつつあるインテリゲンチアだという事を。ここにおいてリアリズムは革命と結びつくのである。リアリズムによる日常実践の中で、革命時における前衛と大衆の間の断絶もある程度まで回避できるとピーサレフは考えたのである。この点がトカチーフと大きく異なるところであるが、それは次章で明らかになろう。

4

トカチーフが、経済的観点からナロードの自立を否定したとは前に述べ

(25) Д. И. Писарев, Ibid. стр., 364

(26) //

た。その際彼が依拠したのは、マルクスの史的唯物論であった。1865年に彼はロシアに初めて『経済学批判』を紹介している。このマルクス経済学との出会いが、トカチョーフをして、ナロードニキ特有のロシアの歴史的発展の特殊性の信仰から免れしめたものであろう。⁽²⁷⁾

だが土台が上部構造を規定する、という史的唯物論の基本的命題の一般的妥当性を認めながらも、トカチョーフは少数の個人には例外もある、と断ることを忘れなかった。社会の変革を担う雑階級インテリゲンチアこそ、この少数の個人なのだ。マルクス主義が後進国に輸入される際、殆んど例外なくそれは経済的宿命論と誤解され、それへの反発として主観的要因が強調される。だがエンゲルスも晩年に表白しているように、マルクス主義は土台と上部構造の相互規定性を承認しているのだ。

十代から実践活動に飛び込み、ナロードに蜂起を呼びかけ、その失敗の反省の中でマルクスの著作と出会ったトカチョーフは、何の痛みもなくナロードを物理的力と規定した。必要なのは経済条件の社会主義的再編であり、そのためには権力の奪取が先決であるとの確信は、彼をネチャーエフに近づけ、政治闘争の重視というナロードニキの聖物破壊へ導く。70年代の彼の活動は、一方でインテリゲンチアの幻想を破壊し、他方でインテリゲンチアの組織化を中心に据えた革命綱領の確立に向けられる。

「真の革命は……革命家による国家権力の奪取という条件の下でのみ実現可能である」従って革命の当面の謂題は、「政府権力をわがもの」とし、所与の保守的国家を、⁽²⁸⁾革命的な国家に転化させる」ことである。この政治闘争を実行に移す上での障害が、トカチョーフによれば、諸々の理想化であり幻想である。中でも最も危険なのが、ナロードの理想化であると彼は再び強調する。

(27) ナロードニキの理論家ミハイロフスキーは、発展の類型と段階なる理論を設け、ロシアは段階的には西欧に後れているが、典型的にはそれにまさるとした。だがトカチョーフは、両文明の違いは段階上のものであり、典型的には少しも異らぬと考えた。См. Б.П. Козьмин 《Из истории революционной мысли в России》 Москва, 1961

(28) П.Н. Ткачев, Ibid, т.3. стр.224

トカチーフに言わせれば、ナロードの革命能力を信じる「ナロードニキ」は、ツァー信仰に安住する支配者と同じ幻想に陥っている。ナロードが生活において圧迫され、直接の支配者を憎んでいることは確かだが、それは革命的破壊活動への可能性を用意するだけで、可能性が現実性に転化するとは限らない。

周知のごとくバクーニンは、革命宣伝を無意味と考え、ナロードの革命的本能を駆き立てるべく煽動を提起した。それとは逆にラヴロフは、即自体としてのナロードは自らの内的欲求を自覚し得ないが、農村でのインテリゲンチアの革命的宣伝により、自らの利害にめざめ自立的行動を起すと考えた。この二派との関係でいえば、トカチーフは、ナロードの革命的準備を否定する点でラヴロフ派に、革命的宣伝を否定した点でバクーニン派に一致する。しかし全体としては両者の綱領を幻想であると退ける。

トカチーフは、ナロードの蜂起が革命の発火点となる、というナロードニキの通念を否定する。ナロードあるいは一般に凡人がプロテストするのは、極度に興奮した時か、自らの行為が処罰されないと確信した時だけである。しかし凡人は粘液質で熱情に薄い。農奴制的忍従は、いかなる苛酷さにも耐えるだけである。よって残るは唯一つ、支配権力の混乱と弱体化を誘い、無処罰の感情をナロードの中に起させることである。更にトカチーフは、革命がナロードによってなされる、つまり革命の主体はナロードであるとする「ナロードニキ」の信念をも幻想として批判する。ここに農村共同体に対するトカチーフの異端的接近が表われる。

共同体農民にある「肯定的理想」とは、家父長的原始共産制である。従って高次の共産主義建設の立場からすれば、「肯定的革命力としてのナロードは、本質的意義を持たない」⁽²⁹⁾次に否定的な革命的破壊力としては、衝動的に地主権力を破壊するが、「自らの内面世界、生活の古臭い伝統的形態は、手を触れられぬまま残る」⁽³⁰⁾から、そこでも相対的意義を持つのみである。ナロードの相対的破壊力に依拠し絶対的破壊を遂行するのが少数インテリゲンチアである。こ

(29) (30) // // т3. стр.265

の破壊の後に建設が始まるが、その場合にはナロードの保守的の性向が逆に役に立つ。「革命的少数者は、ナロードの破壊的革命力を利用し、革命の敵を抹殺する。そして肯定的なナロードの理想(つまりナロードの保守的力)の一般的気分⁽³¹⁾に依拠し、共同生活の新しい合理的な秩序の礎石を置く」とトカチーフは展望する。

一方トカチーフは、「ヴ・ナロード」の持つ意味を否定し、インテリゲンチアが多数であるとの幻想を捨て、「党派ごっこ」を中止し、強固な中央集権的組織を築くよう訴える。このような組織形態もまた「ナロードニキ」の間で忌避されていたものである。だが革命家が反ブルジョア的な理想をめざし、ナロード大衆の解放に自己を全面的に捧げる時、アナキストの言うように、組織、権力が人間を墮落させることなどあり得ない、とトカチーフは言う。

こうして彼は現在における革命を唱える。トカチーフにとって革命家が存在することは、革命的情况が存在する事の最良の証しであり、現在における革命を信じない革命家とは形容矛盾なのだ。革命情况のこのような捉え方はピーサレフとはっきり異なる。そこには自己が革命家としてあるのは、単なるイデーや主義に発した事ではなく、現実生活の中でそうならざるを得なかったのだ、という意識が極限的に表現されている。それはまた革命の実践から理論を模索したトカチーフと知識体系に対する懐疑から社会変革の道へ入って行ったピーサレフとの違いと言っても良いかも知れない。

加うるに当時のロシアの特殊的情况が、トカチーフに革命を急がせた。トカチーフによれば、ロシア国家は西欧と異なり、強固なブルジョア資本に支えられることのない超階級的な専制国家である。従って今なら相手は階級としてのブルジョアジーではなく、政治権力だけである。それにトカチーフには、共同体が解体を始め、富農層を生んでおり、それ自体経済的な意味を喪失することによって、ロシアが資本に基礎を置くブルジョア国家へ転化しつつあるという危機感がある。従って革命を起すなら今を置いて他にない。トカチ

⑶) // // // crp.266

ーフは予言する。「今か、さもなくばずっと先か、ひょっとすると永久にだめか、³² 現在、情況はわれわれに味方しているが、十年二十年先には、敵対するようになろう」と。

5

ピーサレフとトカチョーフは、自らを冷徹なるリアリストと称したが、その名の通り彼等の批判の鋒先は、インテリゲンチアの幻想に向けられた。共に書物、言葉によるナロードの啓蒙の可能性を否定した後、ピーサレフは層としてのインテリゲンチアの自立の中にナロードの自立の契機を求めた。一方トカチョーフは少数者の中の少数インテリゲンチアの強力な指導を革命の絶対必要条件と見た。このように両者では呼びかけた対象が異なる。ピーサレフがバザエロフを革命家の原型として積極的に評価したのに対し、トカチョーフがそれを革命家の戯画と捉えた事の中に、その差異は端的に表われている。⁽³²⁾ ピーサレフは社会変革のプロセス自体の中で、ナロードが自立することを期待したが、トカチョーフは、理想社会が建設されるまで、ナロードの自立はあり得ないとした。ピーサレフの描くナロードの自立過程は長期にわたる。しかしこの長い道のりを踏まない限り、ナロードが、いや社会を構成する各個人が、主体的に意識的に社会を変革し建設することはあり得ない、と考えるのである。革命的気運の消えた時代に、インテリゲンチアはこのような方向においてのみ、自己を徒らに否定することなく、その持てる力を十全に発揮し、その上に立って初めて迎合でもなければ押しつけでもない真の連帯をナロードとの間に築き得るとピーサレフは確信した。だがこのプログラムが、暴力革命を視野に取りこんだ時、少くとも形態的には、トカチョーフ的な少数インテリゲンチアの独裁的指導に行きつかざるを得なかった。それは啓蒙と、革命情況におけるナロードの意識の覚醒の可能性を否定した当然の帰結であった。しかしその事の是非がどうであれ、両者がナロードニキに、いやインテリゲンチアの運動一般に対して

32) П. Г. Пустовойт Роман И. С. Тургенева «Отцы и дети» и идейная борьба 60-х годов XIX века Москва 1964 стр. 365~370

発した警鐘の意味は大きい。「ナロードの前に跪拝したり、ナロードを高い地位に置いたりする必要はない。逆に、われわれが彼等に厳しく接し、彼等についてのわれわれの意見を卒直に表明すればする程、われわれは彼等への尊敬と愛情を、彼等にそれだけ多く立証することになる⁽³³⁾」とトカチョーフは言うが、この信念はピーサレフにも共通するものであった。

ピーサレフとトカチョーフは、三年間程『ロシアの言葉』、『事業』誌の同人として共に働いた事がある。この事実は両者の思想的関連を探る上で欠かせないものであるが、資料不足のため残念ながら後の課題としたい。またこの論文では、ナロードニキの異端としてピーサレフとトカチョーフを取り出したが、本文で述べたような視点からすれば、チュルヌィシエフスキーもまた一つの大きな異端であり、その他にも何人かの思想家が異端として考えられる筈である。従ってこの意味でも本論文は片手落なものであることを、最後に断っておきたい。

(筆者の住所：東京都杉並区南荻窪 3-13-11 安井方)

(33) П. Н. Ткачев, Ibid. т. 3 стр. 260